

《JICA だより》

## ナイジェリア国半乾燥地域森林資源 保全開発現地実証調査

森 下 朝 充

“ここは、地の果て……”と歌われる地中海に面した国、アルジェリア。そこから南へ下り、サハラ砂漠を越えるとアフリカの雄、ナイジェリア国がある。アフリカのへそ、ちょうどアフリカ大陸が中央部でくびれた所に位置し、大西洋に面した国である。日本からは、一般にヨーロッパを經由し、どこまでも続く砂に煙る大サハラ砂漠を越えてやってくる。

夜の闇が首都ラゴスの町を包む午後7時、飛行機は、ゴムタイヤをきましてランディングする。タラップを降りるとムワッとする暑さ、一見近代的に見える空港、しかしクーラーは故障中の箇所が多く、照明もどこか暗い。黒い顔にはさほど驚かないが、異様なまなざしに一瞬たじろぐ。通関の厳しさは天下一品とのことであるが、なんとか通り抜ける。ホテルのチェックインもこれまた難しい。事前に予約金を払い、確認の文書とレシートを持っていても手続きには時間がかかり、部屋の鍵を手にするまではとても安心できない。

一夜明けると、刺すような太陽の光がまぶしい。白い砂浜に続く光り輝く海は、まぎれもなく大西洋。ここは、ナイジェリアである。ラゴスの中心には、結構高層ビルが何本か建ち、首都としての体裁はそれなりに整っているように見える。石油価格の下落により10数年前の繁栄はないものの、アフリカの大国として今でも活気はある。博物館には、ナイジェリアの歴史が収められており、エジプト文明の頃、あるいはそれ以前にかなりの文明がこの地に栄えていたことを証明している。

首都ラゴスから北へ900km、ジェット機で約1時間、それ程起伏を感じさせない原野に1本だけある滑走路。コントロールタワーもなければ空港ビルもない、ただ平屋の簡素な建物が数棟ある。ここが、林業投融资課が担当し、ペルー国アマゾン林業開発現地実証調査に次いで開始された「ナイジェリア国半乾燥地域……」とおそらくJICAのプロジェクトの中で、最も長い名称を持つプロジェクトのある町、カドナである。

半乾燥地、北方にサハラ砂漠を控えているだけに暑さは一層身にこたえる。空港より車で20分、町の中心街に入ると道の両側には、マンゴー、ジャカラダなどの木

MORISHITA, Asamitsu: JICA/FRIN Trial Afforestation Project in Semi-arid Area in Nigeria

国際協力事業団林業水産開発協力部



写真-1 開所式にて  
ババングダ大統領（左より2人目）  
林業試験場長キオ氏（ひとりおいて  
マイクを持っている）  
堂ノ協大使（そのとなり）



写真-2 試験場内 Project の看板

が繁り、レンガ造りの古い由緒ありそうな建物も多く、しっとりと落ち着いた雰囲気が感じられる。

この町は、かつて英国植民地時代に総督府の置かれていた町であり、英国人好みに作られ、歴史と伝統の感じられる町と言ってよい。

ただ、人々の暮らしは質素で、トタン屋根や泥壁の家も多く、道端では薪や炭、野菜や果物、ピーナッツやクッキーなどを売っているが、量も少なく、けっして質が良いようには思えない。

子供達は、ほとんどが素足で履もあちこちほころびているが、そんなことはいっこうに意に介することなく元気に走り回っている。子供達の明るさは、貧富にかかわらず万国共通のものである。

車や電気製品などは、こんな田舎町までにと思われる程、メイド・イン・ジャパンのものが多いが、一步町を出れば、そこに繰り広げられている生活は、のんびりしたもので、ゆったり牛を追っている人と、とうもろこし畑を耕している人と、昔ながらの自然の生活を営

んでいる。

そんなブッシュと呼ばれる低灌木の原野にコツ然と姿を表わしたのが、我がプロジェクトサイトである。事務所やワークショップ等建物は周囲の環境にあまり違和感を与えないようにと配慮し、平屋ブロック建としたものの、やはりここでは目立つ存在である。R/Dは、昭和61年8月に締結され、協力期間5か年でスタートしたが、専門家の第1陣3名（リーダー、業務調整、造林）が日本を出発したのは、翌年1月であった。次いで、第2陣3名（育苗、林業機械化、機械整備）が、4月に出発し全員集合となった。

そして、前述の建物施設が完成したのが昭和63年4月末であり、開所式がナイジェリア国ババングダ大統領の出席のもと、6月3日プロジェクト事務所前広場において盛大に開催された。ナイジェリア側は、各州知事多数の他、部族長まで民族衣裳を

表-1 造林5か年計画

区 分	1987	1988	1989	1990	1991	計
試 験 林	25	245	210	170	0	650
事業化試験区	25	227	178	170	0	600
精密試験区	0	18	32	0	0	50
展 示 林	0	0	40	0	0	40
計	25	245	250	170	0	690

表-2 対 象 樹 種

## 試 験 林

(事業化試験区)

*Acacia auriculiformis*, *Eucalyptus camaldulensis*, *E. citriodora*,  
*E. cloeziana*, *E. tereticornis*, *Pinus caribaea*, *P. oocarpa*

(精密試験区)

*Eucalyptus camaldulensis*, *E. citriodora*, *E. cloeziana*, *E. tereticornis*,  
*Pinus caribaea*

## 展 示 林

*Acacia auriculiformis*, *A. nilotica*, *A. senegal*, *Anogeissus leiocarpus*,  
*Azadirachta indica*, *Cassia siamea*, *Casuarina equisetifolia*,  
*Eucalyptus camaldulensis*, *E. citriodora*, *E. cloeziana*, *E. saligna*,  
*E. tereticornis*, *Gmelina arborea*, *Grevillea robusta*, *Khaya senegalensis*,  
*Parkia clappertoniana*, *Pinus caribaea*, *P. oocarpa*, *Prosopis africana*,  
*Tectona grandis*

身にまとい出席し、日本側は、堂ノ脇大使をはじめ、氏家林野庁監査官を団長とする作業監理調査団及び宮本農開部長を団長とする農業調査団も出席した。

当日は、受け入れ機関である科学技術省林業試験場の木工品等展示会も開かれ、記念の木製プレートも配られるということもあり、近郷近在から大勢の人々が集まり、テレビ・新聞等にも報道された。

一般に、先進諸国に限らず途上国においても知名度というものは最も重要なものの1つである。“JICA? それ何、フン!”と言われ、くやしい思いをすることがあるところ、ナイジェリア国において絶大な権力と影響力を持つ大統領が、忙しい日程を調整までして開所式に駆けつけてくれ、スピーチの中でこのプロジェクトの重要性を訴え、国民の理解を求めたことは、その後どれほどスムーズなプロジェクト運営に寄与したことか計り知れない。

また、昨年8月サヘル植林運動の一環として北海道より28名の大部隊による植林ツアーが当プロジェクトを訪れ、現地カドナ市商工会議所をはじめとする地元の人々

と協力し植林を行った。この植林ツアーは、我が国において初めての試みであり、場所が場所だけに多くの不安があったものの、結果的にはほとんどトラブルもなく、友好のうちに帰国し、アフリカの大地に根付けとばかり、現地住民と手を取り植林している写真等が掲載され、有意義な、貴重な体験であったと発刊された「グリーン・サヘル、アフリカ理解の旅」は伝えている。

終りに、実証調査の概要を付記する。造林面積は表-1、対象樹種は表-2の通りである。試験林において、2つの試験区を設けているが、事業化試験区は、近隣の既往造林地の実績から成績の良いユーカリ類4種、マツ類2種を選定し、工程・経費等を検討し、今後の事業化の基礎データを収集する区域とし、精密試験区は地拵（耕耘）方法、中耕除草方法や苗木の養成方法別生長試験を行い、作業方法の改善のための基礎データを収集する区域としている。

---

## ●シンポジウム 乾燥地緑化の社会的・技術的課題

——砂漠の緑化推進を対象として——

1. 主催 日本学術会議森林工学研究連絡委員会，林学研究連絡委員会
2. 共催 砂防学会，日本林学会，日本緑化工学会，日本造園学会，地すべり学会
3. 日時 平成元年（1989）6月7日（水） 13：30～17：00
4. 会場 日本学術会議講堂（1F）
5. 次第
  - 開会挨拶 武居有恒 日本学術会議第6部会員・森林工学研究連絡委員会委員長
  - 話題提供
    - ・砂漠の自然条件及び人間と砂漠について  
石 弘之（朝日新聞科学部編集委員）
    - ・砂漠にマングローブを育てる  
向後 元彦（東京農業大学総合研究所客員研究員）
    - ・緑化技術の可能性  
小橋 澄治（京都大学農学部助教授）
  - 討論
    - 司会 山口伊佐夫 森林工学研究連絡委員会幹事
    - コメンテータ 蜂屋 欣二（日本林業技術協会技術指導役）  
阿部 征雄（筑波大学農林工学系助教授）  
村井 宏（静岡大学農学部教授）
  - 閉会挨拶 上飯坂 実 日本学術会議第6部会員・林学研究連絡委員会委員長
6. 協賛 財法林学会，林業土木コンサルタンツ，林業土木施設研究所，  
日本林業技術協会，砂防地すべり技術センター，日本緑化センター，  
日本治山治水協会